

「嫌よっ！わたしは栗が心配なの。そんな	する。	番才の隣を歩く女将が、背中越しにそう提案	用意しておくかい？」	「ならあんたは残ってみんなの分のお茶でも	重ねて女将に文句を言う。	紅蘭の頭の上に寝そべり、仏蘭が軽快な歌に	いいんじゃないの？」	わからないけど、残って別のことしてた方が	あるわけ？どこに行くのかも何をするのかも	「ていうかつ、こんなに全員で行く必要が	ろと目的地もわからず歩いてきた。	先に裏口が見える薄暗く長い廊下を、そろぞ	る。その後ろに着いていく番才たちは、遠く	繋ぎ楽しそうに廊下を闊歩（かつぽ）してい	先頭を歩くおかつぱ頭の子供は、名取と手を	いしいくたのしいくうるわしい〜♪」	「おいしいいくたのしいくうるわしい〜♪お	不思議な道中
---------------------	-----	----------------------	------------	----------------------	--------------	----------------------	------------	----------------------	----------------------	---------------------	------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	-------------------	----------------------	--------

「夜蜘蛛？」	れていつてもらったから。」	を見届けた後で、番才に夜蜘蛛のところを連	「ああそれね。平気よ。あなたの傷が治るの	いた。	長い廊下を歩くその歩速は徐々に遅くなって	しまう。結果的に紅蘭は視線を落とす、長い	仏蘭を見上げようとすると後ろにずり落ちて	れたってさつき。それはもう平気なの？」	「怪我・・・したんでしょ？身体のどこかが壊	「大丈夫ってなにがよ。」	思考が生まれる。	できた余裕に、ようやく自分以外の誰かへの	今の状況を少しずつ理解し始めた脳の片隅に	「あなたは、大丈夫だったの？」	える声で尋ねた。	最後尾を歩く紅蘭は頭の上の仏蘭にだけ聞こ	「んっ？何？」	「ねえ仏蘭。」	番才の唸り声はまたも歌に掻き消されていく
--------	---------------	----------------------	----------------------	-----	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	-----------------------	--------------	----------	----------------------	----------------------	-----------------	----------	----------------------	---------	---------	----------------------

助け	心	て	「	紅	「	代	「	「	「		て	い	「	あ	頼	い	相	分	「
け	に	あ	で	蘭	・	わ	・	痛	・	「	い	る	気	し	ん	や	応	を	「
に	だ	る	も	の	・	り	あ	み	・	「	の	の	に	ら	で	し	別	「	
行	っ	く	心	伏	あ	に	る	は	・	お	か	か	の	わ	み	の	の	「	
く	て	こ	は	せ	る	歌	わ	感	・	い	、	、	、	れ	た	に	に	「	
こ	く	と	あ	て	の	が	け	じ	・	し	片	も	、	た	わ	差	に	「	
が	る	が	る	い	よ	聞	な	る	・	い	腕	平	「	け	。	し	に	「	
で	の	で	わ	た	。	こ	い	の	・	く	と	気	と	ど	、	替	の	「	
き	。	き	い	時	目	え	じ	？	「	も	片	よ	「	、	「	え	。	「	
な	だ	な	し	も	が	て	ゃ	」		も	足	」	と	今	は	て	の	「	
か	か	か	い	、	上	く	な				で	と	伝	は	必	も	。	「	
っ	ら	っ	し	感	が	る	い				頭	え	え	要	ら	ら	。	「	
た	す	た	情	情	が	。	く				を	よ	よ	な	つ	つ	。	「	
。	ぐ	。	だ	だ			」				こ	う	う	い	っ	っ		「	
怖	に	怖	っ	っ							つ	る	る	」	て	て		「	
く	あ	く	っ	っ							と	わ	わ		軽	軽		「	
て	な	て	っ	っ							叩	し	し		く	く		「	
声	た	声	っ	っ							い	い	い					「	
も	を	も	っ	っ														「	

な	角	よ	辛	ら	「	く	陽	光	先	力	て	「		進	足	を	な	不	出
っ	を	名	い	何	な	聞	気	が	頭	づ	。	は	路	場	開	っ	思	な	な
た	曲	取	役	の	ー	こ	に	届	を	く	。そ	い	を	へ	く	議	っ	な	な
四	が	。	目	問	に	え	聞	か	歩	で	れに	こ	と	と	こ	と	頭	な	な
人	っ	」	を	題	。	て	こ	な	く	。	。わ	え	と	と	と	と	の	た	な
の	た		担	も	あ	し	え	い	こ		た	い	と	と	と	上	し	な	な
宿	時		っ	な	ん	ま	て	い	の		し	た	と	と	と	に	ほ	な	な
泊	か		て	い	だ	う	た	た	場		ど	と	と	と	と	乗	ん	な	な
者	ら		く	よ	ね		歌	で	で		う	と	と	と	る	と	ん	な	な
を	目		れ	。	。		で	は	中		す	も	と	と	一	仏	だ	な	な
置	に		た	気	あ		す	黒	は		る	も	と	と	同	蘭	た	な	な
い	見		ん	に	ん		ら	く	先		こ	も	と	と	は	が	か	な	な
て	え		だ	病	だ		ど	染	ほ		と	で	と	と	縫	少	っ	な	な
、	て		ね	む	と		こ	ま	ど		し	き	と	と	霊	し	た	な	な
関	足		。	こ	じ		か	っ	の		ま	な	と	と	の	だ	。	な	な
係	取		あ	と	ゃ		物	て	廊		っ	く	と	と	間	け	。	な	な
者	り		り	じ	な		哀	見	下		た	な	と	と	の	な	。	な	な
た	が		が	や	し		し	え	よ		の	ね	と	と	方	か	。	な	な
ち	重		と	い	た		。	る	り		で	。	と	と	へ	っ	。	な	な
は	く		う	い	し				も		、	」	と	と	と	下	。	な	な

ご馳走が待ってる。」	「おうおう、元気でいいねえ。もう直ぐだよ	女将の袖を引っ張り子供が催促する。	「ねえねえ、お腹空いたく。まだく？」	「あんだ達を信じているからこそだよ。」	を受けてどうするかを考えると、いう役目があ	以外にも、わたしらに何かがあつた時にそれ	だろ。あんだ達にはここで待つという役割	かい全員に何かがあれば、誰も助からない	「何が起こるかわからん状態で、全員で向	後ろで仏蘭が声を上げた。	「なによ、着いて行っちゃいけないわけ！？」	「あんだ達はここで待つときな。」	女将や名取たちがこちらを向いて立っている	宿泊者たちが追いつくのを待っていたのか、	り得策とは言えない。」	「さて、ここからは全員で向かうのはあま	気づき、番才の胸の内に一気に不安が広がる	いつの間にか女将が隣にいなくなつたことに	水が紙に染み渡るように闇に溶け込んでゆく
------------	----------------------	-------------------	--------------------	---------------------	-----------------------	----------------------	---------------------	---------------------	---------------------	--------------	-----------------------	------------------	----------------------	----------------------	-------------	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------

つ	い	先	ほ	ど	ま	で	そ	こ	に	い	た	女	将	の	影	を	探	し	、
ん	だ	・	・	・	。														
（	女	将	さ	ん	に	だ	っ	て	心	が	あ	る	・	・	心	が	あ	る	
す	。																		
に	な	り	、	番	才	は	特	大	の	た	め	息	を	鼻	か	ら	吐	き	出
に	気	を	と	ら	れ	て	い	た	自	分	が	ほ	ん	の	少	し	だ	け	嫌
に	一	瞬	鼓	動	が	跳	ね	た	。	今	の	現	状	の	改	善	ば	か	り
雷	鼠	が	誰	と	も	な	く	尋	ね	る	。	純	粋	な	子	供	の	質	問
「	お	ば	あ	ち	ゃ	ん	も	寂	し	か	っ	た	の	か	な	？	」		
っ	て	し	ま	っ	た	。													
に	消	え	て	い	き	、	あ	の	歌	も	徐	々	に	聞	こ	え	な	く	な
そ	の	言	葉	を	合	図	に	女	将	や	名	取	た	ち	は	暗	闇	の	奥
わ	ご	と	）	だ	と	思	っ	て	聞	き	流	し	て	お	く	れ	。」		
も	悪	く	な	い	気	分	さ	。	ま	あ	、	年	寄	り	の	戯	言	（	た
は	思	う	け	ど	ね	、	た	ま	に	は	こ	う	し	た	苦	労	や	危	険
分	と	久	し	ぶ	り	で	ね	え	。	平	和	や	平	穩	が	一	番	だ	と
「	ひ	っ	ひ	っ	ひ	っ	。	こ	ん	な	に	騒	が	し	い	の	は	随	
わ	ね	。」	と	皮	肉	を	吐	い	た	。									
を	挟	ま	ず	、	代	わ	り	に	「	何	だ	か	楽	し	そ	う	で	い	い
仏	蘭	も	そ	れ	以	上	こ	こ	で	待	つ	こ	と	に	関	し	て	は	口

「へい。何が起きてるのかはあっしにもわか	「その中でもだめだったんだね。」	その後木の扉を見つめる。	號虧の提案を聞き、名取は女将と目を合わせ	ねえです。」	よいと中に入るのは控えた方がいいかもしれ	「今はまだ眠っておられやす。ですが、ち	的な揺れだった。	何か巨大なものが歩行しているような、断続	微かに足下から全身を震わす振動を感じる。	まっっているのではと思えるような雰囲気の中	しんとした静寂。空気さえもその場で立ち止	「わたしだよ。女将さんたちを連れて来た	部屋のなかから聞こえた。	「どなたですかい？」と少しくぐもった声が	き、中で何か動いたような気配がすると、	り、二、三度木に打ち付けた。少しの間が空	な木の扉の目線の高さにある鉄の輪を手に取	部屋の扉の前までくると、名取はその重厚	番才は暗闇に目を凝らした。
----------------------	------------------	--------------	----------------------	--------	----------------------	---------------------	----------	----------------------	----------------------	-----------------------	----------------------	---------------------	--------------	----------------------	---------------------	----------------------	----------------------	---------------------	---------------

い	「	ら	「	れ	扉	い	ば	「	や	姉	「	に	「	た	歩	名	な	り
る	ば	、	ね	る	の	？	そ	わ	す	さ	女	な	ひ	た	前	取	刺	や
ん	つ	子	く	よ	奥	？	れ	た	？	ん	将	ら	っ	。	に	は	激	せん
で	、	供	ね	う	か	「	で	し	「	は	さ	と	っ	。	踏	再	は	が
す	、	が	く	な	ら	」	い	た	」	た	ん	は	っ	。	み	度	与	わ
か	、	横	、	音	会	と	い	た	」	だ	、	珍	っ	。	出	女	え	か
い	、	から	お	が	話	扉	ね	く	」	ご	い	し	っ	。	し	将	な	ら
？	、	会	腹	聞	に	を	。	。	」	と	い	い	っ	。	、	へ	い	な
」	、	話	空	こ	割	叩	。	。	」	共	ね	ね	。	。	名	と	方	い
	、	に	いた	え	っ	き	。	。	」	に	。	え	。	。	取	視	が	か
	、	割	く	る	て	へ	。	。	」	空	。	。	。	。	の	線	わ	ら
	、	っ	。	。	入	ば	。	。	」	気	。	。	。	。	で	を	か	な
	、	て	。	。	っ	り	。	。	」	が	。	。	。	。	木	送	ら	い
	、	入	。	。	つ	つ	。	。	」	押	。	。	。	。	の	っ	い	か
	、	っ	。	。	き	き	。	。	」	し	。	。	。	。	扉	つ	い	ら
	、	つ	。	。	な	な	。	。	」	出	。	。	。	。	を	め	か	ら
	、	き	。	。	が	が	。	。	」	さ	。	。	。	。	見	。	。	こ
	、	な	。	。	が	が	。	。	」	い	。	。	。	。	つ	。	。	そ
	、	が	。	。	が	が	。	。	」	け	。	。	。	。	め	。	。	余
	、	が	。	。	が	が	。	。	」	れ	。	。	。	。	。	。	。	計

「女将さん。そこに番才の兄貴はいらっし	號	何	わ	（	（	っ	（	ど	何	が	號	て	と	「	き	女	ら	「	號
女将さん。そこに番才の兄貴はいらっし	虧の瞳孔が開いた。	も映らない視界の先に何かを見つけたのか	たしはどうすればいいのよっ！	一番じゃないとダメなのっ！？わたしは、	・・・わたしは・・・綺麗ですか？	！やめて・・・ください。」	助けてくださいっ！お願いします！嫌です	の出来事が再生される。	も捉えていないが、代わりに頭の中に先ほ	が横たわっている方向へ目を向ける。視覚は	虧は深淵ともとれるような暗闇の中で、雫	もらわねえといけねえ・・・」。	とは、雫の姉さんにその時の様子を思い出し	「そうですか。猿の姉さんがいるというこ	き自分の方へ引き寄せれる。	女将は子供のおかつぱを撫で、名取が肩を抱	ら指示を出して欲しいんだけどねえ。」	「ああそうだよ。それも踏まえて、あんたか	號虧の声が大きくなった。

